慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリアム・レイニー・ハーパーの批判的聖書研究 : 創世記からみる聖書観
Sub Title	William Rainey Harper's critical method of Bible study
Author	松尾, 麻理(Matsuo, Mari)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.109- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000068-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・レイニー・ハーパーの批判的聖書研究

—創世記からみる聖書観—

William Rainey Harper's Critical Method of Bible Study

松　尾　麻　理*

Mari Matsuo

This paper examines William Rainey Harper's Christian faith in terms of his method of studying Scripture. In spite of the widespread idea of his "liberal" point of view toward the Bible study, Harper, in fact, held the same traditional belief in the Holy Word as orthodoxies claimed. Indeed he developed and supported German-originated method of the Bible study that advocated different interpretations of the Book from what orthodoxies upheld. Harper's support for the method, however, did not indicate that he agreed on the literal interpretation with disregard for God's holiness in the Bible. He believed, instead, that critical methods, such as higher criticism, would provide a better understanding of the Word for both students and researchers who would like to know more of God.

After the examination of preceding studies regarding Harper's Christian idea and the broad overview of his life, the discussion begins with his research methods including higher criticism. The next section provides the illustration of his interpretation of the book of Genesis with higher criticism. The following section discusses Harper's intent to use such a controversial method and his belief in God. The final section follows the reaction to the critical biblical study among contemporary theological scholars with Harper.

This study argues Harper's underlying faith behind his seemingly liberal approach to the Bible and demonstrates that instead of degrading conservative Christian values, he had desired to be a servant of God by diffusing the right interpretation of the Bible using his critical methods.

1.　はじめに

19世紀において，キリスト教の道徳的哲学や昔ながらのキリスト教カレッジは，産業の発展，社会ダーウィニズム，自然科学の勢いに大きく押されていた。大学教授は，所属大学外に向けても自分の研究結果を報告することに熱心になり，学者としての評判が，教育責任などと同じくらいに重要にみられるようになっていた。かつてのカレッジのリーダーたちがモラルのチアリーダーとして社会に向けて話

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（教育思想史）

をしていたのに対して，新たな大学では，専門家としての評価が問われることになったのである[1)]。同時代を生きたウィリアム・レイニー・ハーパー(William Rainey Harper, 1856–1906)もまた最終的には，単なるバプテスト派カレッジを設立することをよしとせず，あくまで大学(university)に固執して，その学長に就いている。そして，大学の目的の一つに研究を挙げ，聖書学研究を行うことを推奨した。ハーパーはシカゴ大学の初代学長として，またヘブライ語の研究者として，大学を通してその内外に向けてさまざまな改革を行った人物である。しかし，ハーパーのその行動の原動力となる思想や精神面に焦点を当てて言及した論文は限られている。彼が従事した活動を正しく理解するために，ハーパーの思想を究明することは必要な作業であると考える。とりわけ，本稿では，それまでの精神的存在を優位とした共通概念が根本から揺るがされた風潮の中，キリスト教の信仰とともに生きたウィリアム・ハーパーの宗教観に焦点を当てる。

ハーパーは，正統派の聖書解釈をそのまま引き継ぐことをよしとせず，聖書を批判的に解釈しようとするドイツ学者によって影響を受けた研究方法に賛同していた。こうした研究のもとに発表されたハーパーの論文は，聖書の神性を否定すると批判を受けた。たとえば，プリンストン神学校の教授陣はそれまでの聖書の解釈を科学的研究の脅威から守ろうとし[2)]，その中の一人のW・ヘンリー・グリーンはハーパーの言語学的な聖書分析から結果を導き出そうとする研究方法を批判している[3)]。ほかにも，ハーパーの見解に怒りを覚え，正統派に従うのかそれとも意見を異にするのか，神学の論点に対してハーパーの立ち位置がどこにあるのか返答を要求する手紙が寄せられた[4)]。しかし，こうした主張にみられるほどハーパーは，聖書に対してリベラルな思想を抱えていたわけではないと筆者は考える。聖書の研究の仕方が，正統派と異なるだけで，聖書の言葉に対する信仰心は変わらないのである。実際には聖書の神性をさらに明確にするために批判的聖書研究を行っていたのであり，ドイツ研究者およびドイツの大学にて学んだアメリカ人学者らの影響を受け，彼らの聖書研究法を支持したのは確かであるが，聖書の神性までも否定したわけではない。

本稿では，これまでの主なハーパーの思想研究を検討し，彼の生涯を概観した後に，高等批評(Higher Criticism)に対するハーパーの考えについて言及する。高等批評とは，ドイツに起源を発した文書についての批判調査である。近代聖書学研究において用いられた手法であり，聖書を人が携わり創作された文書であるとみなし，聖書を歴史科学的に分析して，聖書が書かれるに至るまでの解釈を試みる研究手法である。ここで，創世記を例にとり，人が介入するという人的要素をその章の中に読み取りながらも，聖書の神性について確固たる信仰を抱いていたことを明らかにする。このことにより，ヘブライ語や旧約聖書の教授として，ハーパーは高等批評という新たに見いだされた研究をただ単に広めることを目的としていたのではないことがわかるだろう。ハーパーは，多忙を極める中，ヘブライ語についてシャートークアでサマースクールを開いたり，聖職者を相手に通信教育を行ったりした。こうした活動の意図は神の言葉についてより良い理解を普及させることにあり，その信仰心こそが彼の活動の源であったといえるであろう。

2.　先行研究検討

ハーパーを取り扱った文献には，まず，偉人の伝記としてその生涯にわたる出来事を記述したものが挙げられる[5)]。さらに，シカゴ大学史における重要人物として，大学内の活動について主に取り上げられたものがある[6)]。しかし，ハーパーが何をしたかという記録をたどることはできるが，その行動の裏

でハーパーがいかなる信念や思想を抱いていたのかをうかがい知ることは難しい。本稿では，ハーパーの思想面に焦点を当てた検討を試みる。

日本におけるハーパーの宗教的側面に分量を割いた研究では，萩原敏朗が「ウィリアム・レイニィ・ハーパーの大学論」というシリーズ論文において，「宗教と大学」という章をさいて，ハーパーの宗教的信念と大学のかかわりについて着目し，考察を行っている[7]。19世紀後半におけるキリスト教に対する時代の見方に加え，ハーパーがとりわけ宗教教育についてどのような考えを持っていたかについてハーパーの複数の論文をまとめている。萩原は，ハーパーが，既存の宗教勢力や神学校に対して不満を抱いており，聖書の原典に立ち戻って聖書の近代的解釈を一般に広めようとしたと述べている[8]。ただ，萩原の論文では，大学と宗教教育という大きな枠組みのみが着目されていて，ハーパーが聖書をどのように読み込み，解釈していたかなどの詳細には言及されていない。本稿は，この点について論及したい。

アメリカ合衆国における研究においては，ハーパーがキリスト者であることに重点を置き，大学との関係について論じた一人にマイケル・リーが挙げられる。神学校や教会が伝統的な教義を踏襲するばかりで，人々のキリスト教への信仰も揺らぐ中，研究大学がキリスト教を救うとハーパーが考えていたとする論をリーは立てている[9]。シカゴ大学がカレッジであるなら，ハーパーが学長職を引き受けなかったことにリーは着目し，ハーパーが，研究大学を通してキリスト教の教えを確固たるものにしようとしたとリーは論じている[10]。ただ，研究大学だけが，キリスト教の教えを正しく伝えられるとハーパーは考えていたわけではないと考えられる。確かに，研究大学においては，研究をして聖書の言葉を裏づけるという役目を担うことができたが，ハーパー自身は，すでに研究大学に勤める以前から聖書について研究を行い，その結果を発表していたし，ヘブライ語のサマースクールも開始していた。ハーパーの研究に対する熱意は，研究大学において最もよく理解されただろうし，そうした環境をハーパーは好ましくとらえていただろう。しかし，いかなる環境にあれ，研究をして発見をするという姿勢は，大学に勤める以前からすでにハーパーは重視していたということを押さえておく必要があるだろう。

また，ジョージ・マーズデンは，19世紀末から20世紀初頭にかけてのバプテスト派の開かれた雰囲気の中，学長ハーパーのもとで，シカゴ大学の神学部が1890年代以降，アメリカの好戦的な神学的リベラリズムの中心となったことを挙げ，リベラルな思想の持ち主としてハーパーをとらえている[11]。ハーパーが，研究に科学を取り入れて，正統派の聖書解釈を否定した点[12]，シカゴ大学が聖書に関してとっている態度について批判した手紙を全国各地から受け取り，憂慮したロックフェラーが宗派の権限内における神学部から新たな神学雑誌を出版することを提案したときも，神学部とは関係なしに大学の名のもとに新たな雑誌*American Journal of Theology*を出版した点[13]，モーゼ五書の著者定説に異を唱える新たな見解に影響を受け，イェール大学に移ってから，さらにリベラルな意見の擁護者となった点[14]などを挙げ，ハーパーのリベラルだとされる面を描き出している。確かに，ハーパーは正統派と異なる聖書解釈を支持してはいたが，それがハーパーの信仰をすべて表現しているのではなく，正統派の信仰を否定してなかった点や彼らと好戦的に意見を闘わせようと思っていたわけではない点を考慮することで，ハーパーの聖書観を明らかにしていきたい。

3.　ウィリアム・レイニー・ハーパーの生涯[15]

ハーパーは，1856年にオハイオ州ニューコンコルドで長老派の両親のもとに生まれた。1870年にマ

スキンガム・カレッジ(Muskingum College)にて学位取得後，1873年に，イェール大学へ進学し，2年後には博士号を取得している。在学時には，ベルリン大学にて学んだ言語学者ウィリアム・ホイットニーのもとで研究を行い，ホイットニーの研究姿勢および研究能力の高さを理想の大学教授の姿とした[16]。1875年，テネシー州のメイソニック・カレッジ(Masonic College)に勤め，翌年，オハイオ州，グランビルにあるデニソン大学(Denison University)で教えはじめ，2年半を過ごした。この間に，バプテスト派の祈祷会で，長老派からバプテスト派へと改宗している。ハーパー自身は，どんな教派とも関係を持っていなかったため，ハーパーをよく知る人たちは，彼が祈祷会に姿をみせたことに驚いたという[17]。会の終わりに立ち上がり「私はキリスト者がどんなものかわからない，でも自分がキリスト者でないことはわかっていて，そしてキリスト者になりたいと思っている」と述べたという[18]。この祈祷会の何がハーパーを変えさせたのかは定かではない。しかし，それまで単に良本としてしかみていなかった聖書を信仰をもってとらえるようになった転機といえよう。ハーパーは，キリスト教の信仰を個人的に受け入れる前の数年間，聖書が単にありふれた書物であることを，他人に確信させることができるような発見を目的に聖書を研究していたが，そのような研究というのは中身がなく，自分の見方は結局誤りであったと振り返っている[19]。その後，イリノイ州のモーガンパークにあるバプテストユニオン神学校(Baptist Union Theological Seminary)において教授職の申し入れがあり，自らの人生の働きを神聖な目的に仕えることだと感じた[20]。1886年には，イェール大学のセム語の教授職を受け，語学教育に携わる。学外では，ダウンタウンで町民に聖書の講演を行い，請われて他の町にも出かけ講演を繰り返したり，ヴァッサー・カレッジ(Vassar College)で講義を担当したりする。その後，神学校を立て直して新たに創設するシカゴ大学の学長にと請われ，1891年に就任した。1906年にがんでその生涯を閉じる直前まで，シカゴ大学を中心に多方面にわたり精力的に活動を続けていた。

4.　ウィリアム・レイニー・ハーパーの批判的聖書解釈

本章では，高等批評を用いた研究についてハーパーの考えを明らかにしたうえで，次に，高等批評を実際に用いた創世記研究の一部を概観する。そして最後に，その研究結果に対して，ハーパーがいかなる信仰を抱いていたかについて言及する。

4-1.　高等批評支持

ハーパーは，1884年に，*Hebraica*という雑誌の刊行に際し，ヘブライ語の研究が不十分なために成し遂げられていないことが多く存在していると論じる[21]。研究の成果を発表する機会を*Hebraica*において提供し，セム語に携わる研究者のコミュニケーションの場としても活用されることをその目的に掲げ，セム語，文学，歴史に関するどんな議論にも当雑誌が開かれていることを読者に向けて呼びかけた[22]。さらに，ハーパーが何よりも強調したのは，そうした研究が独自性を持つことであった。これまで神学校において実行されてきた研究や教授の方法は最善ではないことをハーパーは指摘し[23]，今までにない新しい考え方や論説を歓迎した。ハーパーは伝統的な考えにとらわれることなく，研究を通して新たな発見をすることに価値を見出し，よりよい方法を賢明に用いることでさらに多くのことが獲得できると考えたのである[24]。

そうした姿勢は，学生に対しても求められた。ある聖書の一節について誰かがいったことを暗記したり，他人を通していつも学んだり，常に従ったりして満足している学生には真の進歩がない。結果ばか

りをみて，どうやってその結果に至ったのかというプロセスをみておらず，事実，真の研究をしてはいないのであるとハーパーは持論を転換している[25]。続けて，研究姿勢について次のように論じている。考慮している事柄について人が何といっているのかではなく，聖書が何といっているのかという真の聖書の知識を得ること，歴史的出来事を踏まえて思考を研究する習性を持つこと，さらに，単独で研究する習慣を身につけること，すなわちある一節の意味や影響力を自分自身で追求し，決定する力を得ることを挙げている[26]。何か読んで，なぜそうであるのか，それが真実なのか尋ねることなく，常に信じてしまうようであれば読まないほうがましであるというのがハーパーの見解であったといえる。質問を提起し，すでに検証されていたとしても，再度検証し，十分な証拠のないさまざまなことについて疑念を差しはさむことが「考える」ということだとハーパーは，みなしており[27]，自ら課題を立てて探究する姿勢を好ましくとらえていたことがうかがえる。

翌年も，同様の内容をハーパーは学生に向けて発信し，批判的に聖書を研究することを勧めている。1)　歴史研究を行うこと，2)　文献研究を行うこと，即ち様々な文献の文学形式の研究，著者や年代への疑問などを研究すること，3)　解釈についての研究をすること，つまり表面的なことだけではなく，深く隠されたものを追求するといった研究をハーパーは呼びかけている[28]。聖書の一節を研究しても前後関係が合わなかったり，書物全体を見据えていなかったりするようでは，意味がないのであり，結果を導き，論理的かつ包括的な方法をとる重要性を論じた[29]。

このような聖書の研究は，ハーパーが高等批評を支持していたことを表している。前述したように，ハーパーは，ドイツの学者の影響を色濃く受け，高等批評を提唱していた。1890年までに2,000名以上のアメリカ人留学生がドイツへと渡り[30]，やがて研究調査に価値をおくドイツの大学で教育を受けた若き学者たちが，その価値をアメリカへと持ち込んだ。そして，19世紀の末には新しいタイプの研究が根を下ろし，学習は発見の過程とつながり，教えることは，個人の研究を指導することと結びついた[31]。ハーパーは，ちょうどこの時期にシカゴ大学の学長に就任しており，ドイツ型の研究大学を目指すとともに，かねてよりその科学的研究法を自分の研究において採用していた。研究を通して新たな真実を発見すべく批判的に聖書を研究し，その手段として高等批評があったと考えられる。

高等批評を支持することは，つまり正統派と聖書解釈を異にするわけであるが，その姿勢は*Hebraica*を出版した1884年にはすでにみることができる[32]。従来の伝統的聖書解釈を単に受け継ぐというよりはむしろ，自分自身で新たな視点から研究を行い，その真偽を確かめるという姿勢をハーパーはすすめた。高等批評は，聖書における歴史的起源，著者や年代などの研究を目的としており，歴史的観点から聖書を分析する手法をとるが，その考え方は，1888年の*Hebraica*の5巻において，モーゼ五書の著者がモーゼであることを否定した論文における主張にも表れている。たとえば，ハーパーは，創世記の著者は3人であるという持論を打ち立てたが，これが正しければ聖書の創世記以外の残りの書物にも共通して適用できなければなければならないと考えた。もしそうでなければ，この論にはまだ研究する余地があるとして，研究によって聖書を批判する姿勢を是としていたのである[33]。さらに，預言について研究するとしても，預言内容の前に，まず預言の背景にあるイスラエルの歴史を知ることが先であると考えた[34]。ハーパーは，旧約聖書の預言書を高等批評を用いて書かれた本を絶賛し，その著者であるA. B. デイビッドソンが，健全な批評というのは，事実について的確な知識，的確な判断力などを示しており，これは言葉と文体の熟知によってのみ得られると考えたことに共感を覚えた[35]。そして，この本がすべての神学校でテキストとして使用されるべきであり，聖書の授業で，研究の基礎となるべきであると論

じている[36]。そして，高等批評を預言書に適用したらどうなるか，その結果を知りたいという人がいるならば，この本を読ませてみるがいい。そのうえで，高等批評の評価をしてもらいたいという言葉で論を締めくくっている[37]。つまり，それだけ高等批評を用いることで，研究の成果が期待できるとハーパーが考えていたことがわかる。高等批評という言葉が誤解されたり，誤用されたりしているという事実があるが，だからといってわれわれがその言葉を用いるのをやめるという理由にはならないとして高等批評の成果をハーパーは高く評価した[38]。

4-2.　創世記の人的要素

ここでいう人的要素とは，聖書が書かれる過程における人のかかわりを指す。聖書は神の言葉であると同時に人間の言葉によって書かれていることにハーパーは着目したのである。歴史的観点から綿密な研究を行ったうえで，ハーパーは，創世記における人の要素について論を展開した[39]。ハーパーがいうことには，聖書は神の言葉ではあるけれども，人の言葉で書かれているのである。そして，人の言葉というのは，不完全なものであって，神の言葉を人の言葉で表そうとする時点で限界があるのである。そのうえ，われわれが持っている聖書のもととなる資料の大部分は，当時の言葉つまりわれわれが全く知らない言葉に由来しているのである。例えば，アダムやイブという名前にしても古代に使われていた名前の翻訳であるし，アダムの存在を当然に思っているかもしれないが，その名は本当はアダムではなかったのである，と[40]。さらに，当時使用されていた言語を全く同等の意味でヘブライ語に翻訳ができているわけではない。加えて，アルファベットも異なるし，綴りの誤りもあるというようにテキスト上，人の介在が否定できないことを述べる[41]。つまり，聖書が書かれる過程において常に人の介入が認められることをハーパーは指摘しているのである。

続いて，創世記の内容について以下のような複数の疑問を投げかける。第一に，創世記となるもとの資料は文書の集まりであって，それがモーゼの耳の中で神によって話されたものであり，モーゼによって書きとめられたという説を唱える者は誰もいない。それでは，これらの文書の発信元は何なのかということになり，今承認されている話がいかなるものであれ，そこに人の要素が大きく入っていることは認めざるを得ないのである[42]。第二に，人間の目的という以上に神の意図が創世記にはみえづらい。洪水について合計97節にわたり書かれているのに対し，天地創造に割かれたのは31節でしかない。神にとって，天地創造よりも洪水の方がずっと重要であったのか。それとも，これは著者の特性によるものなのか。神の意図を見過ごしているのか，それとも人間が著者ゆえの不備であろうか[43]。第三に，たとえば5章と11章10節から26節など内容が重複している章に誰もが気づく。5章から11章までに書かれていることは半分の言葉で表すことができるのである。そこに人間の存在がみえはしないだろうか，と[44]。第四に，これらの章において，妙な構成法がみられるのである。ヤハウェとエロヒムという言葉の使用が，説明がつかないのである。同じ内容で表現が異なるうえ，章が変わると文体も異なる。これが神の影響によるものなのか，それとももとの文書の特質なのか[45]。以上のように，ハーパーは伝統的解釈では，説明がつかない点を挙げ，創世記における人間のかかわりを指摘する。

さらに，創世記が古代ではなく比較的近代において複数の文書がまとめられてできたものと考えると，次のことに気づくとハーパーはいう。異なる書き手が同じ出来事についてさまざまな説明をしていること，創世記のもととなる資料が口承で伝わっていること，実際の出来事よりも数世紀遅れの話が認められること，書き手の時代の考えにより彩色，拡大されたこと，そして，編者の存在が認められ，人

がそこにかかわっていないということは考えられない，と[46]。また，創世記を研究してみれば，相違や不一致があることに気がつくとハーパーは指摘しており，こうした相違は，文法の使用，言葉の用法，修辞学的表現方法，歴史上の記述などに関係していて，二人以上の書き手によって創世記が書かれたという想定に立てば，そうした違いの深刻さは緩和される。三人が同じ出来事を目撃し，同じ題材で書いたというほうが，一人の手によってすべて書かれたと想定するより説明がつくのであると論を展開した[47]。

ハーパーは，知識を得てそこから実証を積み重ねることによって得られた結果に価値が見いだせるのであり，その事実に自身の分析を加えることに研究の価値があると考えていたのである。したがって「専門家の発見が聖書全体の理解において統合されて初めて研究の究極の目的が果たされたといえるのである。それが言葉と文を研究することの唯一の目的である[48]」とハーパーの研究姿勢をとらえたリチャード・ストアの指摘は正しいといえる。しかし，ハーパーはただ単に歴史研究を通して聖書全体が筋の通るものとすることだけを志していたのだろうか。実際「キリスト教研究すべてにおいて最大の目標は，キリストを知らない人へ福音の真実を伝えることである」とハーパーは述べており[49]，このことについて次に考察を行いたい。

4-3.　ハーパーの信仰心

以上のように，ハーパーの唱えた聖書研究は，合理性や一貫性などを求め，さらに，聖書の完成に人間の手が加わっていることを認めていた。実際，ハーパーは，聖書の一節まで全体のつじつまが合うように細部にわたり研究を行っていたし，そのような手法を否定する正統派に対して苦言を呈していた。しかし，だからといって聖書の神性を否定したような発言は見当たらないのである。それどころか，むしろハーパーはグランビルで得た神への信仰を生涯にわたり持ち合わせていたといえる。このことが，彼の全人生やユニークな性格のもととなっているといわれているほどである[50]。ハーパーは，超自然的あるいは神聖な存在を信じていたのである[51]。たとえば，ハーパーは，父なる神，人間としてのキリスト，信仰によって生じる聖霊を信じていた。このどれ一つ欠けてもキリスト者としての信仰は成立しないし，神の子キリストを受け入れることなしに，自身がキリスト者であるということはできない。この点について，ハーパーは，キリストは，神を人に知らしめるために人間の姿になって現れたという信仰を確かに抱いていた[52]。そして，神を知らないことは，歴史の真の哲理を知らないことであり，われわれの存在目的を知らないということであると論じている[53]。キリスト者にとって，人間の存在理由とは，神を知り，従うことにほかならず，ハーパーの言葉はそのことをよく表しているといえる。ハーパーは，神が人の心の内に入る機会を得，心が不正から向こうむきになるとき，われわれは神の手の動きや神の基準に忠実であるという印がみえるのであり，こうした中で神自身がみえると述べた[54]。そして，そのような神に信頼をおき，どこまでも自分自身をゆだね，神の意思に導かれることを説き[55]，神をすべての人間に実際に存在するものとしてとらえている[56]。彼は「神は危険を恐れることなく足をつけることができる岩である」[57]と述べているが，これは何があっても揺らぐことのない確固とした存在という意であり[58]，いかにハーパーが聖書をもとに神に信頼を寄せていたのかがわかる言葉である。研究においても，聖書との関わりなしに，どんな研究も先に進めることはできないとハーパーは考えており[59]，ここに聖書を礎とするハーパーの研究に向かう姿勢を読み取ることができる。

ハーパーは，先に概観したように創世記における人的要素を見いだしている。この論文は，神そのも

のである聖書の中の一冊の書物についての考察であるが，実はそこに人間が大きくかかわっているということを示したものであり，一見，ハーパーは聖書の神性に疑問を投げかけていると解釈する者が現れても不思議がないような論が展開されている。しかし，この論文を読むだけではハーパーの真意を判断することはできない。ハーパーは，人的要素についての論を公表した翌月に，今度は，創世記における神的要素を取り上げた論文を同雑誌に載せ，創世記の神的要素について詳述している。たとえば，創世記の明白な預言的特徴は，注目に値するものであり，その預言こそが聖書の神性を示す重要な要素であると論じている[60]。さらに，聖書の言葉に着目して，創世記の章は，神の言葉を含んでいるというより，神の言葉そのものであり，神の言葉から成っていると論じた[61]。イスラエルの歴史は，神聖であり，その歴史から生じた文献は神聖である。神の歴史および真の神の言葉をみつけるために，イスラエルの歴史および文献に立ち返らなければならない。歴史と言葉は，それぞれ神聖な目的と行動，信仰と義務を対象とした啓示の現れと考えられ，完全で間違いがない，と[62]。しかし，聖書となる資料が神の言葉でありながら誤りや不正確な記述を含むのはなぜかという問いをハーパーは立てる[63]。その理由として，人間の手が加わっているものはすべて完全に違いないということを支持することは不可能であることや宗教的真実にかかわることを除いては全く誤りがないことを求める必要がないことをハーパーは挙げる[64]。

次に，創世記の物語が神性であるにもかかわらず，キリスト者・懐疑論者の両者の多くがその神性が見分けられないのはなぜかという問いをハーパーは立てた。創世記の話の歴史的・宗教的価値を信じる人はほとんどいないと思っている人はおらず，話の中の神的要素に反証しているのではないとして，人間によるひどい解釈が，神性を否定させてきたのだとハーパーは考えた[65]。聖書となる資料の事実が提示され，神的要素の視点が理解されたとき，人は，もはやこれらの章を神聖な言葉の構成的部分として受け入れることをためらわないだろうし，これらの章の不信を聖書全体の不信の言い訳にすることもないだろうと論じた[66]。つまり，人間が書いた言葉の誤りや誤解を伴う解釈が神性を見失う原因になったとハーパーは考えていた。続けて，聖書の字面だけを扱ったことが，ユダヤ人を盲目にし，救世主が現れた際に拒否するに至らしめたように，逐語的でうわべだけの読み方では，今日の人々の目もみえなくさせ，旧約聖書を神聖な言葉の一部としてみなすことができないでいるとした[67]。聖書を単なる研究対象として，文字を読み解くことに警鐘を鳴らしたのだった。

ハーパーは，誤った見解を受け入れてしまった人は責められないが，これらの章を注意を払ってみていけば，罪や神の愛について無関心ではいられないと述べる[68]。ここには，つまり聖書の表現がいかなるものであれ，そこに述べられていることは真実であり，それに気づくことによって，神の存在に気づくという彼の見解が表れているといえる。ハーパーは自分の掲載論文が人の助けとなったならば，その奉仕の機会を与えてくれた神に感謝したいと述べる一方で，「もし私の言葉が誰かを困惑させたり，もし神，キリスト，聖書への信仰を弱める何かがあったりしたら，私が与えたかもしれないよくない影響を神が弱めてくれることを，そして，そのような人には，弱っている人の側にいて真実が有害で，真実を探求することは誤りであると何とか信じ込ませようとする悪の策略に対抗する特別な強さを心から願っている。真実は神聖で，それを探求することは人間がなせる最高に名誉となる仕事である。ゆえに，真実を探求することは神を探求することなのである」[69]と言葉を続けている。

ハーパーは，自分のような批判的聖書研究の結果を公表することの難しさを感じていたのである。ハーパーは，宗教と知的生活という二つの間で衝突があることを自覚し，次のように述べている。教会

史において時折，人は重要なテーマを持つ研究に達してきたが，教会の教義と矛盾するとみなされ，こうした人々は死に至ることさえあり，苦しんできた。歴史上，人々が高等教育を恐れ，難色を示した時期があり，とりわけ大学生や大学出身者が困難な目に遭った，と[70]。しかし，キリスト者の信仰というのは「私に従いなさい」という神の言葉の中に多くが集約されており，世間の言葉よりも神の言葉に耳を傾けたのであろうと考えられる。

5.　批判的聖書研究への反応

新たな大学における多くの研究者にとって，正しい知識を携えた学問の追求は，歴史的なキリスト教の放棄であった。福音派の教育者たちは，啓蒙主義とキリスト教の統合をむしろ主張する傾向にあり，一方で，神学的に保守的なプロテスタントは，新たな見方をもとに知的生活を再建しようとすることはなかった[71]。福音派が，啓蒙思想の価値をキリスト教の世界観に取り込んだのに対し，原理主義者は，歴史的キリスト教や19世紀初期の思想形態に傾倒しており，新たな思想が伝統的な神学や道徳への攻撃と同じ立場をとるときには特に，不審を抱いた[72]。高等批評は，社会の歴史的文脈から研究を行い，古代人の歴史や文学を記録した書物や聖書を学者がよく理解できると考えられ，正統派は，聖書解釈に対するこの研究方法を頭から認めないわけではなかった。というのも，神の目的についてより明確な知識を得ようとして探究する際に価値があると信じていたからである。しかし，タイラー大学の歴史学教授ウィリアム・リンゲンバーグは，多くの高等批評が，聖書は主として人間の書物であると強調する傾向に対して正当派が強く異議を唱えたのだと指摘している[73]。しかし，19世紀末には知的革命が起こり，伝統的世界観に対して疑いが向けられた。ハーパーに関しては，伝統的聖書解釈に苦言を呈してはいたが，神を否定する発言を行ってはいないし，自らをリベラルだと位置づけたこともなかった[74]。結局のところ，神の超自然的な性格を認めていたのである。

ハーパーの属するバプテスト派は，批判的聖書研究をどのようにとらえていたのか。ジョージ・マーズデンによれば，バプテスト派は，伝統的信仰を持つが，同時に教義上の自由を重んじており[75]，こうした比較的オープンな雰囲気が聖書批判を宗派の間に急速に広めたという[76]。ハーパーの伝統的解釈の率直な否認を心配する人がいたとしても，より多くの人が，彼の敬虔で建設的な批判によって，現代の研究よって生じた，聖書はもはや人間にとって神の最高の啓示ではないという絶えずつきまとう誤解から解放されて喜んでいるとシカゴ大学内から声があがっている[77]。ほかにバプテスト派の声がどんな声があがったのか，その一部を概観したい。ロチェスター神学校の校長を務めたエゼキエル・ロビンソンは，学生が伝統的見解を受け入れることをすすめなかった。それは，ただそうした見解が過去の世代から伝わっていて，一般に健全な見解よりも人間の分別をより信頼したいというあからさまな態度に学生を導いてしまうからである[78]。また，同じくロチェスター神学校の歴史の教授を務め，後のバプテストユニオン神学校（後のシカゴ大学神学部）校長となったジョージ・ノースロップは，一般に長い間アメリカンバプテスト派が受け入れてきたカルヴァン主義から離れた一連の論文を出版している。聖書批判に対しては寛容な姿勢をとっていた[79]。ロチェスター神学校の校長であり，組織神学の教授であったオーガスタス・ストロングは，聖書には間違いがないと擁護することをやめ，高等批評を極めて好意的に受け入れるようになっていた[80]。さらに，聖書学者のジョン・ブローダスは，牧師および教師として南部の至る所で影響を与えていたが，優秀な学生にはドイツの大学で大学院コースに進むことを奨励していた。ブローダスの宗教経験は非常に深く，聖書の権威に対する信仰も根づいていたので，聖書が受

ける徹底的な検証を平然ととらえていたし，その煎じ詰めについて不安がなかったのである[81]。ブローダスが聖書批判に寛容であったのはこうした理由によると考えられる。ハミルトン神学校は，長い間バプテスト正統派の防塁であり，聖職者や大学教授などを輩出していた。そこで，ネイサネル・スキミッドは，セム語の優秀な教授であったが，高等批評を旧約聖書に使用したことで職を辞している[82]。バプテスト正統派は，聖書の啓示の保持を唱える方向へ徹底的に影響を受け，聖書へ高等批評を用いることを嫌悪した。さらに，そのような批判を実践し，推奨するような学校を，真のキリスト教の影響を弱める悪魔の手段としてみなした[83]。

以上にみるように，高等教育において，個人や機関によって批判的聖書研究に対する意見は分かれる。ハーパーの論文を批判対象とする意見もある。冒頭で述べた，プリンストン神学校のW. グリーンがその例であるといえよう。シカゴ大学においても，保守派の意見はあったものの，設立当初から保守的見解に固執しない雰囲気が優勢であったようである[84]。シカゴ大学には正統の教理は消滅したと思われ，中西部においてその教理を守ることを目的に，1913年にノーザンバプテスト神学校が設立されている。

6.　おわりに

ハーパーは，自分の聖書解釈をもって誰かと論争することを意図していたわけではない。それにもかかわらず，特に正統派から批判を受けたという印象があり，事実，それは正しいのかもしれない。しかし，根底では，神への忠実な信仰を持つという点においては，正統派と意見を同じくしているのである。むしろ，ハーパーと異なるのは，批判的研究に固執するあまり，聖書の神性を信じることができなくなった研究者たちである。彼らにしてみれば，ハーパーの姿勢はどっちつかずで煮え切らないものに映ったかもしれないが，彼らの反応については今後の課題として検討していきたい。正統派が敵視したのは，このような聖書の言葉を否定する研究者たちであったはずだが，ハーパーも同種の研究手法をとっていたがゆえに，批判の矛先が彼にまで向けられたと思われる。そうした誤解をハーパーは懸念していたが[85]，最後まで確固とした態度で研究を貫いている。

それは，一つには教会などの圧力に屈しない研究の自由をハーパーは，何よりも重んじたため，自ら矢面に立とうともその自由を浸透させたいという思いがあったからといえる。そして，そこから生まれた研究結果こそが真実を伝える役割を担い，キリスト教のよりよい理解への普及へもつながると考えていたからである。確かに学生に向けても高等批評を用いた批判的聖書研究をすすめたが，研究方法を教授することが最終目的ではなかったのである。ハーパーの神に対する信仰が深くかかわっていることを明らかにすることで，ハーパーがサマープログラムや雑誌の発行，その他キリスト教にかかわる活動の意図を読み取ることができるといえよう。

今回は，ハーパーの聖書の読み方からキリスト教に対する考え方を明らかにした。しかし，それを構成するに至らせたのが何であったのかまで分析が及んでいない。したがって，ハーパーの聖書観の源流をたどり，その主たる活躍の舞台が大学であったことを覚えて，今後，彼の考えるキリスト教研究及び教育と大学の関係がいかに形成されてきたのかを課題として進めていきたい。

注・参考文献

1)　Mark A. Noll, 2006. “Introduction: The Christian Colleges and American Intellectual traditions,” William C.

Ringenberg, *The Christian College: A History of Protestant Higher Education in America*. Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, pp. 30–31.

2) Michal Lee, 2008. "Higher Criticism and Higher Education at the University of Chicago: William Rainey Harper's Vision of Religion in the Research University," *History of Education Quarterly*, Vol. 48, No. 4, The History of Education Society, pp. 515–516.
3) W. Henry Green, 1889. "The Pentateuchal Question," *Hebraica*, Vol. 5, No. 2/3, The University of Chicago Press, p. 138.
4) Laurence Veysey, 1965. *The Emergence of the American University*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 374.
5) Thomas Wakefiled Goodspeed, 1928. *William Rainey Harper: First President of the University of Chicago*, Chicago: University of Chicago Press, Milton Mayer, 1957. *Young Man in a Hurry: The Story of William Rainey Harper: First President of the University of Chicago*. Chicago: The University of Chicago Alumni Association.
6) Thomas Wakefield Goodspeed, 1916. *A History of the University of Chicago: The First Quarter-Century, Chicago*: The University of Chicago Press. Richard. J. Storr, Harper's University: The Beginnings, Chicago: The University of Chicago Press.
7) 萩原敏朗，1982.「ウィリアム・レイニィ・ハーパーの大学論—その3 —シカゴ大学創設期における『大学と社会』—」『東北大学教育学部研究年報』1982年，第30集，pp. 161–181。
8) Ibid., p. 166.
9) Lee, "Higher Criticism," p. 511.
10) Ibid., p. 509.
11) George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-Century Evangelicalism: 1870–1925*, New York: Oxford University Press, p. 105.
12) George M. Marsden, 1994. *The Soul of American University: From Protestant Establishment to Established Nonbelief*, New York: Oxford University Press, p. 244.
13) Ibid., p. 245.
14) Ibid., p. 243.
15) ハーパーの生涯については，以下を参照とした。*Mayer, Young Man in a Hurry*; James P. Wind, "Harper, William Rainey," Feb. 2000. American National Biography Online. Retrieved 20 December 2007 ⟨http://www.anb.org/articles/09/09-00335.html⟩; Willard J. Pugh III, "The Beginning of Research at the University of Chicago," Ph.D. diss., The University of Chicago, 1990.
16) Daniel Lee Meyer, 1994. "The Chicago Faculty and the University of Ideal, 1891–1929," Ph.D. diss., The University of Chicago. p. 43.
17) Goodspeed, *William Rainey Harper*, p. 35.
18) Mayer, "Chicago Faculty," p. 13.
19) Harper, "Intellectual," p. 109.
20) Meyer, "Chicago Faculty," p. 44.
21) William Rainey Harper, 1884. "The Purpose of Hebraica," *Hebraica*, Vol. 1, No. 1, The University of Chicago Press, pp. 1–2.
22) Ibid., p. 2.
23) Ibid., p. 3.
24) Ibid., pp. 4–5.
25) William Rainey Harper, 1886. "Old Testament Studies: An Announcement," *The Old Testament Student*, Vol. 5, No. 6, The University of Chicago Press, p. 274.
26) Ibid., p. 275.
27) William Rainey Harper, 1904. "Our Intellectual Difficulties," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 103.
28) William Rainey Harper, 1887. "The Study of the Bible by College-Student," *The Old Testament Student*, Vol. 6,

No. 7, The University of Chicago Press, p. 199.

29) Ibid., pp. 201–202.
30) Meyer, "Chicago Faculty," pp. 14–15.
31) Ibid., p. 16.
32) Harper, "Hebraica," pp. 1–5.
33) William Rainey Harper, 1888. "The Pentateuchal Question. I. Gen. 1:1–12:5," *Hebraica*, Vol. 5, No. 1, The University of Chicago Press, pp. 18–73.
34) William Rainey Harper, "Outline Topics in the History of Old Testament Prophecy II. Prophetic Situations: Amos. Isaiah. Zephaniah. Deutero-Isaiah. Principles of Prophecy," *The Biblical World*, Vol. 7, No. 2, The University of Chicago Press, pp. 124–129.
35) William Rainey Harper, 1905. "Old Testament Prophecy," *The Biblical World*, Vol. 25, No. 1, The University of Chicago Press, pp. 43–45.
36) Ibid., p. 45.
37) Ibid.
38) William Rainey Harper (1889) "Study XXII: The Higher Criticism of the Books of Samuel," *The Old and New Testament Student*, Vol. 9, No. 6, The University of Chicago Press, p. 356.
39) William Rainey Harper, "The Human Element in the Early Stories of Genesis," *The Biblical World*, Vol. 4, No. 4, pp. 266–278.
40) Ibid., pp. 266–267.
41) Ibid., pp. 268–270.
42) Ibid. p. 270.
43) Ibid.
44) Ibid.
45) Ibid., p. 271.
46) Ibid. pp. 270–271.
47) Ibid., p. 274.
48) Storr, *Harper's University*, p. 59.
49) Harper, "Study of the Bible," p. 199.
50) Charles Rufus Brown, 1906, "His Religious Life," *The Biblical World*, Vol. 27, No. 3, Memorials of William Rainey Harper, The University of Chicago Press, p. 225.
51) William Rainey Harper, 1904. "The Religious Spirit," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p.23.
52) William Rainey Harper, 1904. "Trials of Life," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 68.
53) William Rainey Harper, 1904. "Certainty and Uncertainty," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 99.
54) William Rainey Harper, 1904. "Loyalty to Self," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 73.
55) William Rainey Harper, 1904. "Dependence," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 87.
56) William Rainey Harper, 1904. "Fellowship and Its Obligation," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 55.
57) William Rainey Harper, "Dependence," p. 85.
58) 岩についてのたとえは，旧約聖書サムエル記下22章3節，詩編18章2節，62章2節などを参照されたい。
59) William Rainey Harper, 1904. "Our Intellectual Difficulties," *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 106.
60) William Rainey Harper, 1894. "The Divine Element in the Early Stories of Genesis," *The Biblical World*, Vol. 4,

No. 5, pp. 356–357.

61) William Rainey Harper, 1894. "A Theory of the Divine and Human Elements in Genesis I.–XI.," *The Biblical World*, Vol. 4, No. 6, p. 413.
62) Ibid., p. 413.
63) Ibid., p. 415.
64) Ibid., pp. 415–416.
65) Ibid., p. 418.
66) Ibid., pp. 418–419.
67) Ibid., p. 419.
68) Ibid., pp. 419–420.
69) Ibid., p. 420.
70) Harper, "Intellectual," pp. 102–103.
71) Noll, "Introduction," p. 31.
72) Ibid., pp. 31–32.
73) William C. Ringenberg, 2006. *The Christian College: A History of Protestant Higher Education in America*. Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, pp. 114–115.
74) Robert W. Funk, 1976. "The Watershed of the American Biblical Tradition: The Chicago School, First Phase, 1892–1920," *Journal of Biblical Literature*, Vol. 95, No. 1, The Society of Biblical Literature, p. 5.
75) Marsden, *Fundamentalism*, p. 104.
76) Ibid., p. 105.
77) A. K. Parker, 1906. "The Chicago Period," *The Biblical World*, Vol. 27, No. 3, Memorials of William Rainey Harper, The University of Chicago Press, pp. 185–186.
78) Albert H. Newman, 1906. "Changes of the Theology of Baptists," *The American Journal of Theology*, Vol. 10, No. 4, The University of Chicago Press, p. 596.
79) Ibid.
80) Ibid.
81) Ibid., pp. 597–598.
82) Ibid., pp. 599–600.
83) Ibid., p. 608.
84) Jeffrey Paul Straab, 2004. "The Making of a Battle Royal: The Rise of Religious Liberalism in Northern Baptist Life, 1870–1920," Ph.D. diss., The Southern Baptist Theological Seminary, pp. 223–266.
85) Veysey, *Emergence*, p. 374.